

# 私の見たブラジルの農業(第1回)

中南米技術協力専門家(元岡山県専門技術員) 田中文哉

## グッタパラの移住者

### ブラジルに第一歩を印す

ここグッタパラは、私が11月2日ブラジルに第一歩を踏み入れて初めての訪問地です。いやというほど太陽が照りつけて、日本では見られない初夏の日ざし、サンパウロ総領事館の渡辺領事が運転するベンツが心地よく風を切って、サンパウロ——ブラジリアの幹線をひた走りに走る。

同行するものは農林省農政局拓殖課長坂村さん、榎本技官、それと私の3人です。アスファルトでよく舗装された2車線の道路は、80キロから100キロ、さては120キロの速度でブラジルの山野を馳せていく。ここの地形が丘の連続なので、上り下りが規則正しく1つの丘の波が1キロから1.5キロくらいである。

ブラジルというと百人百色の説明をする。灼熱地獄という人、いや住みよいいところという人、色々ある。ことほど左様に北と南、東と西では大きな相違がある。ここサンパウロ州は南回帰線の23度を中心に、6度程度南と北とにひろがる南米の最高条件の地である。街は800メートルの高さに開けているので年中暑さ寒さを知らないという。

### 新天地グッタパラへ

私は何をしておき、日本人がどのような農業をやっているのか見たくて仕方なかった。幸いなことに拓殖課長の一行が来られたのでこれ幸いと、最も理想的といわれるグッタパラ移住地を見学することにした。グッタパラはサンパウロ州リベロンプレト郡にある。南北11キロ、東西7キロの豊かな土地です。

ここは岡山県のほか6県が共同購入して模範的移住地を造成しようと試みた、いわば県の共同経営農場である。従って入植した農家も100万円程度の推行資金を条件として選ばれた各県の一騎当千の農家



グッタパラ移住地 '64.11.3

整然とならんだ本部前の施設学校もあれば共同施設もある

である。岡山県の方も、新庄村の篤農家岩佐弘さん、灘崎町の杉本重雄さんなど8名ばかりの方々が移住されている。(この両氏にはお逢いして親しく感想を聞くことができた。)

### グッタパラの農業は

さて、このグッタパラの農業は一体どんな農業なのか、私は自動車ですつと通ったにすぎない、誰からもここの農業について聞いたのではない。ただ本

## 岡山畜産便り 1965.01

当に見たままの感想を述べることにしよう。

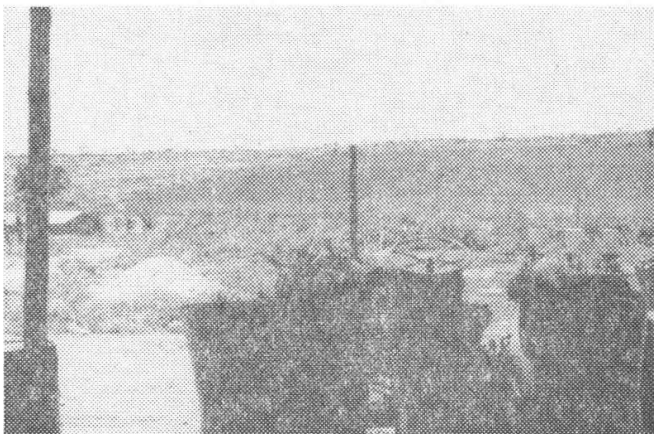
ここには丘の最良の耕地にラランジャ（日本のネーブル）の2年生の苗木が植えられていた。低湿地はかん水栽培による陸稲がいまを盛りと種蒔きされていた。

各農家の周囲はいわゆる菜園で、色々の熱帯植物、バナナやパパイヤなどが植えられ、花も野菜も色とりどりであった。とくに目を引いたのは、養鶏熱の盛んなことで、あちこちに新しい鶏舎が（500羽—1,000羽—1,500羽程度の）建てられつつある姿であった。

この姿を見ると何のことはない。家の形と風景に相違はあれ、低いところは水田（陸稲）、高いところは柑橘園、そして家のまわりがゴチャゴチャと菜園になっている日本風景とかわりがない。いうなれば5反百姓が10町百姓になったということだけで、別にさしたる変りは見られなかった。聞くところによると耕地が概ね4カ所に区分され、1つは水田、1つは果樹園、その他は一般畑地で、耕作するのに4カ所をかけもちで通り耕作をしなければならないような状態だということであった。

### グッタパラの経営的問題

ここらで私の見たグッタパラの経営的問題にふれよう。まちがっているかも知れないが、ここの計画の基本的構想が自給自足を健前とした自立経営の確立か、さらに進んで企業経営まで前進し得る構想を樹立することが可能なのかの問題である。10ヘクタール程度の雑種型経営ではとても企業経営にはなり得ないと痛感した。



グッタパラ移住地の耕地を農機具庫からみる '64.11.3

ここで畑地かんがい方式による陸稲の栽培様式は一体妥当かどうかは問題である。もちろん食生活充実のために陸稲にかん水して多収をねらうことは是認するが、水田経営としてみた場合、その収益性がこのやり方では上がらないのではないかと思われて仕方がない。（まちがっているかも知れないが、投下資本を回収するための水田経営はもう少し生産性の高いことが要請されるであろう）

一部の農家ではあるが養鶏熱が出ている。もしも養鶏專業の方向に進展するのなら10ヘクタール相当の耕地は一体どうなるのか、10ヘクタールの耕地を耕作してさらに養鶏專業にいくための技術的方策がなければ、耕地は荒廢化をまぬがれないのではあるまいか。（もちろん雇傭労働の活用方法はあるが…）

こんなことを考えながら私は初夏の雲がいききしているグッタパラの耕地に立って、どうか経営の方向を確立してまちがった道を歩まずに、1日も早く安定した自立経営からさらに企業的経営への発展を祈ったのである。しかし、岡山県の農家の皆さん、安心して下さい。日本よりもより広い耕地を相手に、岡山県代表の移住者はせっせと成功への第一歩を築きつつあることを確かにこの目で見たことをお伝えしておきます。

## ブラジルの日本人と その農業を見たまま

### ブラジルの農業 コーヒー農業

ブラジルの農業を見るといっても、一口にいえばすごく簡単ですが、日本人の移住地をくまなく見てまわるとなると1年ではとてもできない相談です。2年でもむつかしいでしょう。従って、ブラジルの農業の話も実はある一地方の、しかもほんの一部の農業をかいま見て、ブラジル農業と銘打ってするわけです。

今日の話はサンパウロ市周辺と市の約500キロの西部、そのすぐ南に隣りするパラナ州のサンパウロ

## 岡山畜産便り 1965.01

——ロンドリーナ——マリンガの間、そしてこのマ  
ットグロッソ州クヤバまでの概況をお伝えします。

ご承知のようにいま一番農業地帯として進展をみ  
ているのは、第1がこのパラナ州のそれも北パラナ  
地方、つまりここにお話しようというロンドリーナ、  
マリンガ地方の農業で、次いでサンパウロ州だとい  
われています。このことはすでにサンパウロ州を中  
心として発展したコーヒー農業が、北パラナ地帯に  
移動したことをも意味しています。つまりコーヒー  
農業の発展を1つの表現として、農業地帯で一番発  
展している地方を表現しているわけです。その証拠  
にはサンパウロ周辺は粗放コーヒー経営から都市近  
郊集約経営に変っているのです。それでもブラジル  
ではコーヒーの中心地が今もって農業の中心地とみ  
られていること、このことは古くからブラジルの農  
業＝コーヒー農業と私達が思っているように、ブラ  
ジルでもそう認識しているのです。

## サンパウロ市周辺の集約農業

いまこの地方の農業を大別するとサンパウロ周辺  
はすでに粗放から集約へ、それもサンパウロ市の急  
速な発展に培かれての集約園芸農業の発展が目立  
ちます。従って、日本人の好みに最適で、いやむし  
るこの地方の集約園芸農業は日本人がサンパウロの  
発展とともに開拓した日本人の農業ということがで  
きます。

その代表的なものはそ菜（トマト、バレイショ、  
葉菜類、果菜—キウリ、ピーマン）、果樹（桃、ブド  
ウ）、養鶏（ブロイラー、採卵）で全く日本人の独壇  
場といってよいでしょう。やはり勉強したことにつ  
いては上手です。どこでも成功しており、いまは逆  
に供給過多の観をさえ呈して、今年（64年）などは  
豊作貧乏といわれているようです。果樹ももちろん  
日本人以外もやっていますが、何ととっても日本  
人です。（岡山県吉備郡高松町加茂出身の平松さんは  
果樹指導者の第一人者です）

養鶏もここ3、4年間に全く目まぐるしい発展を  
みせており、これまた日本人によって開発進展をみ  
たそうです。

## 大規模農業と日本人

このように集約園芸農業は何ととっても日本人の  
右に出るものはいませんがさて、パラナ州ロンドリ  
ーナ地方、つまり北パラナの農業となるとちょっと  
日本人には勝手が違います。この地方は甘蔗（砂糖  
キビ）地帯、コーヒー地帯、雑穀地帯に大別されま  
す。コーヒー地帯に入ると、それこそ自動車を2、  
3時間ブツ飛ばしても、全く右も左もコーヒーのオ  
ンパレードです。最近、甘蔗ブームでだいぶ甘蔗も  
作付けされてはいますが、ロンドリーナ周辺はコー  
ヒー地帯でその間に甘蔗畑や雑穀が混在していると  
ころもあります。

日本人の農業は、コーヒー、甘蔗は比較的少なく、  
雑穀農業の移住集団が多いということです。マウア  
という移住集団を見学しましたが、ここは日本人移  
住者が200、300戸くらい集団で7、8年前に入植し  
たそうですが、いずれも陸稲とバレイショを中心作  
物として他作（トウモロコシ、その他）を作付けて  
いました。この人達の意見を聞いてみますと、新開  
拓地を追って3回も4回も移住したが、もうここで  
落ち着きたいと古老がつくづく述懐していました。  
この人のように、もうかる作物を追って借地農のよ  
うに移動々々をくりかえした日本人農家も数多くあ  
るということです。

問題はこのような大規模農業は、コーヒー、甘蔗、  
雑穀いずれの場合もあまり上手でないという結論に  
なりそうです。口で論ずるよりも早く機械化農法を  
誰もが体得するのでなければ、日本農業も成果が上  
らないのではないのでしょうか。



広大な平野の前に立つ田中氏

# ブラジルの開拓と ファゼンダ（大農場）

## ブラジル開拓の小史

12月といえば雪がチラつこうかというのに、ここブラジル、マツトグロッソ州クヤバ市では真夏の太陽がキラキラと黄色いやせた大地を照りつけています。

街の午後は暑さのため寝静まったように静かですが、大きな太陽が西にかくれる頃からよそおいをこらした若者達が街の中央の州政庁前広場集って、夜の更けるのも忘れて青春を謳歌しています。街のショーウインドにはクリスマスの飾りがいっぱいほどこされていますが、暑いクリスマスではさぞかしサンタクロースが困るだろうといささか心配しています。

このマツトグロッソ州はお隣のゴヤス州といっしょになって、ブラジルの中央西部地域とよばれています。この地域はアマゾン地域と同様、ブラジルで開発の最もおこなわれているところで、これから拓かれて行く地方になっています。

ところで今日は、ブラジルはどうして拓けたか、大まかにブラジル開拓の色々についてお話ししましょう。

ブラジルを大きく区分して、アマゾン地域、中央西部地域、海岸沿岸地域、北東部地域と南部地域の5つに区分されています。

## 採取の土地アマゾン

アマゾン地域の開発は、いわゆる採取（集）経済開発方式といって、アマゾンにある自然の香料や薬草やゴム等、または河でとれる魚類などの採取を業とする人々が河口から上流へ上流へと物を求めて上って行き、それをねらって産業資本家がこれ等の採取業者と日用食料や物品を交換して巨大な利益を得て現在にいたっている。いわゆる商人高利貸的取引きによって開発されつつあるといつてよいでしょう。

## 未開発の中央西部、北東部

中央西部と北東部はこれといった開発方式は見られず、わずかにダイヤモンド砂金を求めてゴールト

ラッシュを形成した時代もあるが、今はすべての資源が開発を持っている状況です。

## 奴隷農場の太平洋沿岸地域

ブラジル開拓の代表的実例は、海岸沿岸地域の開発と南部地域の開拓とすることができます。海岸沿岸地域はポルトガルや欧州から移住した大農場主が大資本を投下し、アフリカネグロを奴隷として搾取しつつ巨万の富をつくった。いわゆる大ファゼンダ方式（大奴隷農場方式と名付けておきます）とすることができます。

## 異国風俗の南部

しかし、南部諸州、即ちサンパウロ州以南はこれとは趣きを異にし、欧州諸国（ポルトガル、スペイン、ドイツ、フランス、イタリア、オランダ、そして日本等）から比較のおそく集団移住したところで農業のやり方も生活の在り方もいづれも故郷のままを、そのままもち続けて現在にいたっているところでは、いふならばお国がらをそのままに、風俗、習慣をそのまま温存維持している社会で、ブラジル国における異国という感じのするところでは。

## 奴隷制大農場ファゼンダ

ところでファゼンダについてももう少し詳しくお伝えしましょう。ファゼンダとはブラジル語で農場と訳していますが、この農場主はいづれも白人で、故国から莫大な資本をもって移住し、最も開拓し易い大西洋海岸の平坦地に住みついて、アフリカより移入した奴隷を使って農場を経営したのです。その経営の仕方は、自身の身内や結縁のあるものが支配人となって経営管理を牛耳っていたのです。

## 1つの社会を持つ農場

この頃の農場はいづれも砂糖農場です。砂糖ブームによって急速な発展をみたのがこの地方で、北東部サトウ地帯ともいっています。

さて、砂糖農業の経営の概要は次のようなものです。

製糖工場はこれに付属する木工場、皮工場、鉄工場等を付設しており、その工場を中心として労働者

## 岡山畜産便り 1965.01

や奴隷の食糧確保のための食料作物畑を経営し、さらに原動力としての「馬」を確保するため放牧場の経営もやります。これだけの設備投資を必要とするので、普通のものではできません。大資本をもったもののみが行い得るのです。

白人系の農場主は故国から莫大な資本をもって移住し経営に当たったわけです。そして土地は無償でしたので、自分の好む所で農場経営を始めたのです。

農場主を中心とする人間関係は封建的奴隷制の上にたてられています。農場主、農場監督、各工場長とその幹部は一族で占め、経営がうまくいくように計画します。そして彼等は黒人の女中、乳母、子守を使って生活をするわけです。しかし、人間ですから奴隷の女の中に農場主の種を植えて同族の発展をはかっていた場合も多く、ここに新しい人間関係が生まれ、1つの血が数十数百の同族を得て農場が発展していったということができそうです。このように「ファゼンダ」は奴隷と、1つの血のつながりとこの2つの特徴をもった農場ということができません。

直接の農場労働力は奴隷ですが、農場を直営畑、農場消費自給畑、分益農畑の3つに区分し、自給畑には白黒の混血人を、直営畑と分益農畑の労働者には黒人と人種差別のなかで経営が行なわれたということです。ここらあたりをもう少し詳しく調べてみると面白いと思います。

ファゼンダ方式と名付ける理由は、以上申したように経営の仕組が人種的差別関係（身分関係）と奴隷という労資関係以前の関係のなかで、現在のような大農場主が生まれたことをよく理解しなければなりません。